

医療情報の提供：

図書館と司書の役割の変化

関口 礼子*

1 近年の図書館の変貌

1.1 医療・起業・法律

大手旅行会社の旅行関係の図書館，弁護士会の図書館，教科書図書館，交通図書館などの専門の図書館は以前からあり，またいろいろな会社は自分たちの業務と関連した図書館・図書室を設けている。

最近の公共図書館で目に付く傾向は，経営情報と医療情報の強化である。日本図書館協会理事の常世田良は，アメリカにおける最近の公共図書館サービスの3本柱は，法律，起業，医療であると述べている（谷辺他，2005，p.21）。

団塊の世代が停年を迎えるのを目の前にして，あるいは，最近の世情を反映してリストラや社会の産業構造の転換を契機に起業を考えるひとの増加に伴い，公共図書館でも起業情報を提供するところが増えてきている。例えば，筆者がざっと最近の新聞の記事から拾っただけでも，栃木県小山市の市立中央図書館，静岡市産学交流センターと同市立中央図書館の連携，鳥取県立図書館と鳥取商工会議所シニアアドバイザーセンターの連携，千葉県浦安市立中央図書館，東京都の立川市中央図書館，福岡県立図書館（福岡市）の「ビジネス情報コーナー」などがあり，起業情報を提供している公共図書館は「全国にわかっただけでも30ある」（谷辺他，2005，p.21）とのことである。

本稿では，もう1つの，高齢化社会を迎えて市民の情報要求が高く，最近顕著な傾向を示す医療情報について，述べてみよう。

1.2 一般に公開されるようになった医学関係の図書館

医学専門家をターゲットにする大学等の図書館は古くからあったが，最近の特徴は，それらの図書館の資料を一般の人にも公開しようとするところが増えてきたことである。インターネットで，「公開」としてある医学・医療系の図書館を調べてみると，次のものが見つけられた。条件付公開のものは，除いてある。すなわち，条件付とは，他の図書館や所属大学の紹介状が必要などと，記されているものである。

首都大学東京図書情報センター荒川館／首都大荒川

（独）東京医科歯科大学附属図書館
東京女子医科大学史料室・吉岡彌生記念室
東京大学医学図書館
東邦大学医療センター大森病院からだのとしょじつ

（独）千葉大学附属図書館亥鼻分館
横浜市立大学医学情報センター
明治薬科大学図書館

この中には，「東京都民に限る」などと，地域

*大妻女子大学 社会情報学部

で限定してあるものもあるが、特殊な条件を付していないものを挙げた。ただ、このうち、現に訪ねて、案内を請うたとき、案内する職員が公開されていることを知らなかったところもあるので、公開は、広く推奨されているわけではないところもあるらしい。しかし、現に図書館そのものを訪ねてみると、ちゃんと対応してくれた。

医療関係者の独占的使用のための資料であった医科大学や大学医学部の所蔵する資料を一般市民にも公開しようとしているのは近年の傾向であることは見て取れる。しかし、医大の所蔵する資料は、一般に公開されているとはいえ、内容的に専門的なものである。本稿では、一般市民向けの医療情報とその提供について、述べてみたい。

2 市民のために医療情報を提供する図書館

2.1 医療情報提供の2つのタイプ

医学部の図書館も一般にも公開する傾向にある中で、医療関係者のための専門書を市民にも公開しようとするのではなく、一般市民のために、あるいは患者のために医療情報を提供しようとする図書館が生まれているというのも最近の1つの傾向であるのに気付く。そのようなタイプの図書館の典型的な例をいくつか挙げて、それらはどのように運営されているのかを詳述してみよう。最近の傾向は、2つあるように思われる。1つは、病院が患者向けの図書館を積極的に設け始めたことである。他の1つは、一般の公共図書館が、経営情報のコーナーを設け始めたと同じように、医療情報の提供にも力を入れ始めたことである。

ここでは、その2つのタイプの典型的と思われるものを取り上げ、それらがどのような状況に置かれているかを調べてみることにする。前者の場合は、大学病院のケースと普通の病院のケースとを取り上げる。

ここで取り上げてケーススタディとして例示しようとするのは、

1 病院に付置された図書館の例から

「からだ情報館」(東京女子医科大学病院)

「医療情報・相談室」(都立駒込病院)

2 公共図書館の中の医療情報部門の強化の例から

「医療情報コーナー」(都立中央図書館)

である。

内容を、名称、設立時期、基本方針、資料収集の方針、サービスの対象、職員、資料の貸出、インターネットサービス、その他のサービス、図書以外の設備、開館時間、立地の条件、その他の特記事項、について調べてみよう。用いる資料は、筆者が直接図書館を訪れての観察、職員とのインタビュー、また、図書館が作成しているパンフレット類である。訪問は、主に、2006年2月—5月にかけて1館につき数回、行われた。

2.2 名称

まず名称についてであるが、上記のとおりで、都立中央図書館の「医療情報コーナー」は、図書館のなかにあるので、頭に「図書館」の名があるが、それ以外は「図書館」の名がつかない。「図書館」の名を使わない傾向にある。3館とも「情報」の名称がつけられている。これは、後述のように、「図書」のみが、中心的資料でなくなっていることを反映している。

2.3 設立時期

「からだ情報館」(東京女子医科大学病院)

2003年6月開設

「医療情報・相談室」(都立駒込病院)

2006年2月15日開設

「医療情報コーナー」

「医療情報コーナー」の看板を上げ、サービスを明示したのは2004年4月、しかし、1980年ごろからニーズの高まりが見られ、それに応じて徐々に資料を増やしてきた。(中山担当課長談話)

医療情報への要求は徐々に高まってきていたのであるが、それを意識して、医療情報を提供することに積極的な活動を始めたのは、2003年ごろからであるらしいことがわかる。「からだ情報館」を嚆矢として、ここに挙げていない病院なども、その後、続々と図書館・相談室を通じて、患者へ

の医療情報のサービスに参入してきている。

2.4 基本方針

基本方針と思われるものをパンフレットの中から拾ってみよう。

「からだ情報館」

「ここは皆様の“学習室”です」(総合外来センター, 2005.9.22, p.3)とある。「病気やからだについての様々な情報を得るための場所」である。文献情報を用意すると同時に、「インターネットを通じて、医療の最新情報やニュース」(総合外来センター, 2005.9.22, p.2)を探すこともできる。

「医療情報・相談室」

全体を「いこいの空間」(都立駒込病院長, 2006, p.1)という言葉でまとめている。内容は、「患者さんへの医療に関する情報の提供」「専門の看護師による治療, 療養, 在宅医療などの」の相談である。(都立駒込病院長, 2006, p.1)

その他, この図書館に特徴的なのは, 区立の図書館とのタイアップを行っていて, 団体貸出しを利用して, 「入院中の患者さんへは, 文京区図書館から提供して頂いた図書の貸出し」することである。

「医療情報コーナー」

4階の自然科学室のなかに, 「医療情報コーナー」を設けている。ここには, 「病気や病院についての基本的な資料を置き, 治療法や検査法, 薬, 医師について調べる」(東京都立中央図書館, 2005.7, p.5)ことができる。

また, 「闘病記文庫」を医療情報コーナー内に置き, 「一括して専用書架に配置」している。「代表的疾患を網羅しており, 疾患ごとに並べて」(東京都立中央図書館, 2005.7, p.5)いる。

全体的にみて, 図書を貸し出すところではない。情報の提供を目的としている。「学習室」であったり, 「いこいの空間」であったり, 「調べたり」する場所である。

2.5 資料収集の方針

資料はなんといっても, 図書館の中心である。しかし, 今では, 学習したり調べたりする情報は図書の中にのみ保存されているのではない。どのようなものが収集され, 提供されているかを記してみよう。

「からだ情報館」

パンフレットの例示から, 提供の例の領域を拾ってみると, 次のようになる(総合外来センター, 2005, p.2)。

医学辞典, 医学関連書

一般向け医学雑誌, 医療情報小冊子

院内発行の患者向けパンフレット

ビデオ

インターネット

一般のものほかに, 中央に乳がん学会の発行した治療マニュアルのようなものが置かれ, 来館者が見ることができ, また, その資料について感想を投稿できるようになっていた。

「医療情報・相談室」

室所蔵の中心は医療雑誌, 医療関係の図書, ビデオ, CD-ROMである。

室所蔵の医療関係図書は, 約300冊程度であり, 多くはないが, この病院の診療科に合わせた内容のものを精鋭集約的に集めている, という印象を受けた。

パンフレット類も整理されて並んでいて, これは持ち出し自由であった。

コンピュータも使えるが, 医中誌, メディカルオンラインなどの医学専門のデータベースは利用できない。

この資料の特色は, 文京区立の図書館と連携していることであり, 同図書館から, 医学書以外の一般図書100冊が団体貸出しで借り出され, 並べられていた。

また, 患者用の特殊な下着などの見本も用意してあった。

また, ここに並べられている図書のラベルは手書きであり, 職員が直接手をかけているのがうかがわれた。

「医療情報コーナー」

ここで得られる情報は、どのようなものと想定されているかをパンフレットの例示から拾ってみると、次のようになる（東京都立中央図書館，2005.8.21, p.1）。

特定の病気についての情報
特定の病気の治療方法
病院の検査
薬の副作用
病院の所在地や規模
病院の診療内容
医師についての情報

具体的には、医療関係のコール番号は、49になるので、そのところを強化するという方式をとっている。場所としては4階の「自然科学室」の中に配列されている。自然科学は4000-6690であるが、そのなかの大半が、49番台の医療関係で占められていると言っても過言ではない。他の、自然科学関係の書に較べて、医療情報関係の資料の数は格段に多い。

また、通常の本籍の配列に較べて、配列に次のような特別の配慮をしている。

- 1 4階の入口に、図書館の作成した医療情報関係のファイル及びパンフレットを用意して、入ったらすぐに医療情報の所在について、探しやすいようにしている。
- 2 その傍に特別の棚を設けて、医療に関する需要の多そうな図書のみを配置してある。
- 3 「闘病記」コーナーを設けて、患者が書いた闘病記を931冊集めて、専用棚に別置き、病名別にラベルを入れて配列している。ただし、これは一括寄贈であり、図書館の備品ではないものである。
- 4 他に、闘病記は、図書館自体の蔵書として1000冊くらい所蔵しており、これらは、「記録文学」や「医学」、その他のところに分散して配架されている。しかし、これらは、検索すると、「闘病記」の名称と病名が現れて、識別しやすいようになっている。
- 5 依頼に応じて、医学専門のデータベースもここでは引いてもらえるとのことであった。
なお、都立中央図書館では、利用者のための

「知っている」と便利」という情報パンフレットを出しており、「医療情報」についても存在する。A4版4ページのもので、ときどき改訂される。2005年3月に出された「医療情報」では、書名、出版社、コールナンバー、所在階などが載っている。内容は、1病名（病気の情報）と医学用語、2医師・研究者について（これは人物情報にレフェラルしている）、3病院・学会、4薬について、5医療関係の企業情報、6統計、7法令・判例、8医学史、9医療関係の本・雑誌の情報、に分かれている。

図書館の資料は、図書のみではない。今では情報の載っているものは図書のみではなく、CD-ROMやDVD、その他の媒体でも提供されており、図書館はそれらの媒体を幅広く扱っている。したがって、「図書」ではなく、そうした媒体を全部を合わせて、「資料」または、「図書館資料」という呼び方をする。

2.6 サービスの対象

「からだ情報館」

「患者様、ご家族、ご面会の方々、地域の方々」とあり、住民にも開放している。

「医療情報・相談室」

パンフレットには、「患者さんへの」「入院中の患者さんへは」とある。しかし、現場で聞いたところでは、家族はもちろん、一般の人も利用可能である。

「医療情報コーナー」

一般の図書館利用者と同じで、来館したひとはだれでも利用できる。

2.7 職員

「からだ情報館」

司書1人、看護関係のボランティア1人（退職した師長〈旧来の名称では婦長〉であるとのことである。）

「医療情報・相談室」

司書2人、看護師1人。司書は東京都の公務員ではない。司書のほかに看護師を配置するこ

とによって、他の機関では「医療上のアドバイスはいたしません」とある医療相談、判断も受けることもできるようになっていた。司書は、資料の相談には応じられるが、このような医療上のアドバイスはすることが許されない。患者用の特殊な下着などの見本もあって、試着まですることが許されるのも、看護師がいることによる。

「医療情報コーナー」

司書2人において、交替でレファレンスに当たっている。ここは司書のみであるので、レファレンスまでのサービスである。

2.8 資料の貸出

「からだ情報館」

館内の閲覧のみで、貸出しはしない。パンフレットやチラシは持ち出し自由である。

「医療情報・相談室」

貸出しは、入院患者のみには行うが、一般のひとには行わない。

「医療情報コーナー」

個人への館外貸出しは行わない。中央館なので、ここから直接の借出しはできない。借り出す場合は区立の図書館経由で依頼することになる。

2.9 インターネットサービス

「からだ情報館」

端末がおりてあり、「医療情報検索支援サービス」として、「病気についての情報がどのような医学書に載っているのか、どのような資料があるのか、インターネットを利用して検索」できる。

「医療情報・相談室」

端末があり、自由に使用して検索・ダウンロードできる。また、司書が検索を手伝ってくれる。また、自分のパソコンを持ち込んで、使うことも可能である。

「医療情報コーナー」

一般に、無線LANサービス事業者と契約しているひとは、1階から、「自分のパソコンか

ら図書館資料とインターネット情報を合わせて活用して、オフィスや学校等に調査結果を送信でき」（都立中央図書館，2005.4，p.2）る。

館内のどこからでも、一般の情報検索はできる。特殊な医療関係のデータベースの検索に関しては、一般の「相談係」からではできないが、医療情報コーナーの「相談係」の司書を通じて、検索してもらえらる。

2.10 開館時間

「からだ情報館」

月-金 10:00-16:00
土 10:00-14:00

「医療情報・相談室」

月-金 10:00-16:00
土 10:00-14:00

「医療情報コーナー」

月-金 10:00-21:00
土・日・祝・休日 10:00-17:30
ただし、特別文庫室 10:00-17:30
視聴覚室1 3:00-17:30

2.11 立地の条件

「からだ情報館」

病院総合外来センター1階。自動会計機など会計や予約を行うところと同じ建物でそれらの隣りの空間にあり、立ち寄りやすい。診療を受ける時の待ち時間にフラッと寄ることも可能である。飲食コーナー、売店も隣りにある。

「医療情報・相談室」

バスから降りた停留所のすぐそばにあり、外からも目につきやすいし、行くのも楽である。バスの停留所から外来の受付へ行く途中である。しかし、立地的には、診療の場とは離れている。同じ建物の片隅に自動販売機、コピー機（有料）などが置いてある。資料のあるところへ飲み物を持って行くことは許されない。

「医療情報コーナー」

都立中央図書館の立地は、有栖川宮記念公園内にあり、とても自然環境はよい。しかし、駅から遠く、しかも上り坂であり、病人や高齢者

が訪ねてくるには適していない。また、貸出しはしない。借出す場合は、そこに行って現物を見て、借り出すほど読みたい本があることを確かめて、地元の公立図書館に出かけて行って、そこを通じて申し込み、希望の図書が着いたという連絡をもらって、また取りに出かけて行かねばならない。

公立図書館の一般的慣習に従っているのが、病人や高齢者が利用するには、ふさわしくない。せつかく医療情報を重点的に整備しながら、そこまでの配慮はない。

2.12 その他の特記事項

「からだ情報館」

特定の治療法を勧めるものではないこと、病気に関する知識は日々変化していること、患者の現状に必ずしも一致した知識が得られるとは限らないこと、個人の診療に関する相談には応じられないこと、医療に関する詳しい説明や相談は主治医のところに行くこと。(総合外来センター, 2005.9, p.3)

以上のような制約はあるが、本の探し方、パソコン等の使い方は、気軽に聞いてよいことは強調している。

「医療情報・相談室」

ここでは、看護師を常駐させているので、通常の司書による「患者さんへの医療に関する情報の提供」のほかに、「専門の看護師による治療、療養、在宅医療などのご相談を受けることができます」(都立駒込病院長, 2006, p.1)とある。

「医療情報コーナー」

「このサービスは、資料や情報の提供のみをするものです。医療上のアドバイスはいたしません」「診断、治療、薬、についての判断は、必ず医療機関にご相談ください。」(東京都立中央図書館, 2005.8.21, p.1)

3 医療情報提供からみえてくる図書館の問題

3.1 図書館の医療情報提供の重要性と限界

患者の医療知識の必要性

医療の現状をみると、病院は患者であふれている。「3時間待って3分診療」という言葉が聞かれる。また、医療界ではインフォームドコンセントが通常になり、患者は説明を受けて、治療にたいする同意書を提出することが求められる。しかし、患者が、今までかかったことのない病気という新しい現象について、時間に追われて仕事をしている医師から早口の説明を受けて、同意書を求められても、どれだけの人が本当に納得して署名しているであろうか。

完全に理解するためには、医師から説明を受ける前に、相当の予備知識を得ておくことが必要になる。また、患者自身でなく、周囲の人も、その病気についての知識を常識として持つことも必要になってくるであろう。

筆者が「からだ情報館」を訪れたときも、中年の女性が、自分のためなのか、家族のためなのか、数冊の本を手元に、わき目も振らずに読みふけていた。医療に関する情報はますます求められるようになってくるであろう。

司書の限界

しかし、医療情報といっても、「このサービスは、資料や情報の提供のみをするものです。医療上のアドバイスはいたしません」(東京都立中央図書館, 2005.8.21, p.1)とあるのにも見られるとおり、司書の限界は、顧客が必要としそうな情報の載っている資料を備えて置き、顧客が求めたときにその情報の載っている資料を提供するところまでである。医療的な判断については司書の役割の外にある。「診断、治療、薬、についての〈判断〉は、医療機関にご相談ください」ということになる。しかし、専門的な知識や情報は得ることはできる。

どのような種類の治療があるかということは資料を通じて司書は知らせることができるが、どの治療がよいかというような価値判断は、司書は行ってはならない。

「医療情報・相談室」の場合は、司書2人のほ

かに、看護師を常駐させている。治療に関する相談は、司書でなく、看護師が受ける。看護師は、自分の権限の範囲ではない場合には、例えば病院の医師に判断を求めて回答するそうである。「からだ情報館」もボランティアだそうであるが、看護師がいた。利用者の知りたい欲求の水準も高度化している。司書は医学的な判断をする訓練も免許も受けていない。他の専門職と、タイアップすることも必要になってくる。

人口の高齢化

住民の人口比率に較べて、高齢者の図書館（情報館）利用人口は、極端に少なかった（関口，1987，p. 9，p.11；関口，1995，p.19）。住民の立場からいうと、高齢者は、図書館利用から阻害されているグループであった。その理由はいろいろあるであろうが、いままで図書館の提供する情報の内容が、高齢者にはふさわしくないということもあったであろう。また、先に立地のところで、「医療情報・相談室」のケースで指摘したように、病気で体が弱っている、あるいは高齢で自分が歩くのもままならないような状況では、利用しにくい立地である、ということもあろう。立地や建物などのインフラストラクチャー的条件は、すぐには変えられない。大きな図書館であればなおさらである。日本は超高齢化社会である。病気になる人も多いであろう。ここで取り上げたのは、「医療情報」についてである。病気になるのは、高齢者のみでないが、しかし、今まで抜け落ちていた医療情報に最近力を入れ出したということは、図書館経営の視点から今まで抜け落ちていた高齢者という視点を提供しているといえよう。

プライバシーの保護

ところで、「このサービスを利用される方のプライバシーを守ります」（東京都立中央図書館（2005.8.21，p.1）と明記したパンフレットがあった。他のパンフレットには、改めて記載されていないが、これは、「司書」の倫理綱領の中に記載されている重要な事項である。相談を受ける

「司書」は、利用者の思想信条を知ることになる。また、体や病気のことに關してなら、資料の相談を受けるなかで、身体の状態を知ることになる。利用者が安心して相談サービスを受けられるために、また、効果的な情報を確実に提供できるためには、利用者がどのような困難を抱えており、何のためにどのような情報を求めているのか、相談者からの率直な情報が不可欠である。専門職者としての「司書」は相談者のプライバシーを守らなければならないことをしっかりと理解しているはずである。が、倫理綱領を自分が知っているというだけではなく、利用者にも、それを周知することが必要であろう。とくに、医療情報に關しては、場合によっては、それが文字通り、その人の肉体的生死のみならず、社会的な生死にも係わることだけに、重要になってくる。

3.2 司書の役割と養成

司書というターム

知りたいことの情報の載っている資料を尋ねることを、専門的にはレファレンスという。しかし、前記のように、図書館現場では、「レファレンス」という専門用語を用いず、「相談」とか、「相談員」という言葉を用いていた。専門的資格からいうと、法的には現在でも「司書」である。しかし、この名称は、かつて情報や知識の保存の最も便利かつ確実な媒体は「図書」という印刷媒体であった時代の名残である。現代では、もろもろの媒体がそれに加わった。医療関係の情報の、特に専門的な部分は、オンラインジャーナルが主流になってきている。冊子体を発行しなくなっている学会も少なくない。新しい医療情報を扱う機関が、ここで見てきたように、「図書館」という名称でなく「情報館」という名称を用いているのも、その流れである。図書や雑誌のような印刷媒体が依然として重要な情報や知識を保存する媒体であることは否定できないが、媒体のそうした変化を考えると、「司書」というタームもふさわしくなくなっている。「司書」を「情報メディアの専門職」と説明をつけて表現することも多い。図書のみを扱うのではないということを表す

ように、新しい言葉として、たとえば「情報師」とか「司情報」とかというような名称も考えてみる必要があるのではないだろうか。だれか、もっとふさわしい表現を提案できないであろうか。

医療情報の司書（情報師）の養成

ところで、最後に、司書の養成について一言述べておこう。

医療情報・相談室の司書にいろいろ質問してみた。親切に情報を探してくれたけれど、肝心の医療情報についてはなんとも心もとなかったというのが本音である。この医療情報・相談室は私が始めて訪問した時は開設1週間目であったので、まだ慣れていなかった、ということもあるであろう。ここに勤務する前には、一人は公共図書館、もう一人は書籍店に働いた経験があるとのことであったが、医療情報については特別に経験がないようであった。

現在、司書の資格は、大学を卒業し、大学において図書館に関する科目の単位を取得すれば、得られる。担当の領域に制限がないから、医療、自然科学的事象も含めて、ありとあらゆる文化事象、社会事象をすべて扱うことになる。しかも、世界のどこかの図書館に保存されている資料が全

部対象となる。図書館間相互協力やインターネットが一般化されていなかった時代、扱う資料の範囲は、自館に保存されている資料に限定され、有限であった。今では、自分の勤務する図書館に所蔵する資料のみでなく、無限とってよい。現在行われているいろいろな大学の司書養成課程の授業は、内容的にもかなりの程度に偏りがあるように見受けられる。工夫が必要だと考える。

司書養成カリキュラムの構造

ところで、私の勤務する大妻女子大学多磨キャンパスの司書課程は、今年度からカリキュラムの内容を改訂した。現行の法令で指定されている科目名は変更しないし、現在配置されているコマ数も変更しない。現行の枠内で、授業内容を現代化することにしたのである。その構造を示しておこう。

コマ数を増やすことは不可能であるので、工夫したところは、例えば社会科学を得意とする人ばかりでなくなるようにと、専門的内容での適切な人の配置と、単一の授業で2つないし3つの目的をもたせることであった。それを、人員を図書館学に長けているというだけでなく、それぞれ適切な専門の領域をもつ人を配置することによって、

大妻女子大学多磨キャンパス司書課程の構造

図書館・情報センターの目的：生涯にわたる成長・学習：より豊かな生活をおくるため						
情報の記録方法・記録の集積方法の変遷				現在・将来の図書館・情報センターの経営		
人文系情報	社会科学系 情報	科学技術系 情報	成長・発達に 寄与する情報	医療情報	経営情報	法律・労働 情報
各種の資料（印刷・ デジタル・その他）	いろいろな資料の組 織の仕方		情報探索・検索	レファレンス・ レフェラル サービス	資料の提供	
図書館・情報センター学への導入						

可能にしたのである。人の方は、教育・学習領域担当，人文系担当，社会科学系担当，自然科学系担当，経営情報担当，医学情報担当とさまざまな領域に造詣の深い人を配置することができた。本稿の目的である医療情報は，数年前から担当できる人を求めているのであるが，なかなか来学してもらえない人が見つからなかったのであるが，今回幸いにして，本務先の許可をもらえるひとを見つけることができた。1つのコマで，複数の目的を達成してもらう，ということであるが，医療情報，専門資料論，レファレンスサービス，という目的で1つ（2つ）の授業を行ってもらっている。

3.3 新しい図書館（情報館）の重要性

今，図書館（情報館）は，IT化の影響による人員削減の要求と公立図書館は民営化の波をかぶっている。大勢の職員を擁して人海戦術で業務に従事する図書館はよき昔の夢になってきている。一方では，図書館（情報館）の機能と重要性は，情報化社会で減少するどころか，逆に増してきている。質のよい情報にどう達するかは情報過多社会の必須の考察アイテムになってきている。住民の知的水準は高くなり，それだけに知りたい欲求は増してきている。求める情報も専門化・細分化・個別化・高度化している。図書館（情報館）は，求める人にふさわしい情報を提供することが要求されている。他の機能も兼務しながら，社内や社外の人々，機関内や機関外の人々に情報を提供する小規模な図書館（情報館）は増えてきている。新しいコンセプトで新しい図書館（情報館）の業務と経営のこなせる人が求められている。

引用文献

- 総合外来センター（2005.9.22）。「からだ情報館」．東京女子医科大学総合外来センター．
- 東京都立中央図書館（2005.3 4次改訂）。「知っていると便利：医療情報（病名・病院・薬・法令・統計など）」．東京都立中央図書館．
- 東京都立中央図書館（2005.4）。「利用案内」．東京都立中央図書館．
- 東京都立中央図書館（2005.7）。「何をお探ですか：資料利用のてびき」．東京都立中央図書館．
- 東京都立中央図書館（2005.8.21）。「都立図書館の情報支援：病気やからだ・薬に役だつ情報があります！」．東京都立中央図書館．
- 東京都立中央図書館。「類縁機関名簿」．<http://metro.tokyo.opac.jp/tml/trui/cgi-bin/item-search.cgi?bunruiinput011=BUNRUIFULLLIST&srykbn01001=on&ALLSEARCH=on&FSORT=titleyomi001&dispnum01=100>，2006.4.5採取．
- 都立駒込病院長医療情報・相談室。「患者さんのための〈医療情報・相談室〉がオープンしました。」．都立駒込病院長医療情報・相談室．
- 関口礼子（1995）。「変身する地域の図書館」．『公共建築』No.146，pp.18-21．
- 関口礼子（1987）．『生涯学習：茨城県筑波郡谷田部町社会教育利用者の実態調査』．図書館情報大学教育学社会学研究室．
- 谷辺晃子，河村克兵（2005）。「公立図書館がビジネス応援 融資・起業相談，ファッションショー開催」．『朝日新聞朝刊2005年11月15日』p.21．

Supply of Medical Information : Changes in the Roles of Libraries and Librarians

REIKO SEKIGUCHI

Abstract

Following the recent changes of modern-day society, the roles and functions of libraries and librarians are being changed. This paper deals how libraries are being changed according to the aging population, focusing on the description of libraries offering medical information.

Since around 2000, libraries which offer strategically medical information have increased, as a new branch or a small library attached to medical institutions, or as an extended section in a public library. Three such institutions are taken up as case studies to investigate how these types of libraries are run.

The word "library" is no longer used, but has been replaced by the word "information". As running fundamental policies expressed as "study room" or "space for relaxation" show, library collections are made up not only of printed documents, but also of widely digital and other types of resources which are not lend out, but are used at the place, and only their contents needed are sent to the home of the users through the Internet or, if necessary, are taken out as copies.

Reference service is emphasized but judgment or evaluation on medical treatment and decision making must not be included in the roles of the librarians, therefore for that purpose medical staffs work with the librarians in some libraries.

The training of librarians or media specialists should reflect these recent trends of and needs for libraries or information centres, and should include the training for resources of newly appeared needs such as medical resources. A case of such curriculum modernization in Otsuma University is shown as an example to these trends.

Key Words (キーワード)

library (図書館), medical information (医療情報), librarian (司書), media specialist (メディアスペシャリスト), information centre (情報センター), library resources (図書館資料), medical client (患者), aging (高齢化), library customer (図書館利用者)